

初任者教員の授業力を効果的に育てる方策の研究

—中学校理科の初任者教員との協働を通じた支援から—

所属校：世田谷区立深沢中学校

氏名：藤井 徹 平

派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：初任者研修・授業力・授業力評価・発問・パフォーマンス課題

I 研究の目的

近ごろ子どもたちの学力低下が各所で論じられている。このことに対し教師の力量への要求も大きいものになってきている。そのような背景にあり、団塊の世代の大量退職時代を迎え、新規採用の教員が増える中で優秀な教員の確保も課題となっている。

しかし初任者教員は研修や日常業務に追われ、授業力の向上に向けて十分な研究や満足な支援を必ずしも得ることができていないという側面がある。また初任者教員を指導する教員に対して、育成方法に関する研修が行われている訳ではなく、経験と力量にゆだねられている面がある。

そこで今回の研究では、校内における初任者教員の授業力育成という点に着目し、授業力の構造的な整理を行いつつ、校内初任者研修の中において授業力を効果的に育成できるプログラムの開発を目的とし、所属校に配属となった初任者教員と協働する中で、その方法を整理することとした。

II 研究の方法

1 研究の視点

- ① 授業力とはどのような力なのか。
- ② 初任者教員に求められる授業力とは何か。
- ③ 初任者教員にどのような支援が効果的か。
- ④ 初任者教員の状況把握と適切な指導のためにどのような授業記録が適しているか。

2 手順

- ① 都内公立学校に採用となった初任者Y教諭に、PDCAスパイラルを活かした協働による授業づくりと授業記録を継続。
- ② 外からのアプローチ（授業観察・VTR記録等）と内からのアプローチ（聞き取り・アンケート）より、Y教諭の特性や課題点を把握。
- ③ 特性や課題点を整理した上で、PDCAスパイラル以外の支援（示範授業、模範的な授業の参観、VTRによる自己の省察等）を行う。
- ④ 教授法や授業手法に関する文献調査を行い、授業力の要素の構造化する。

⑤ 初任者研修関連テキストや授業に関する文献調査を行い、初任者教員の目指す姿の設定と成長を示すルーブリックの作成。

⑥ 初任者教員を効果的に育てるための手順・手法の整理。

3 初任者教諭へ支援する上でのスタンス

今回協働したY教諭へは、授業改善へのプロセスにできる限り負担感をもたせないように配慮した。また省察的に自己を振り返らせ、課題点について自ら気づき改善につなげていけるように留意した。課題点を他人に指摘されることよりも初任者自身で気づき意識することの方が、授業力の育成により効果的であるとの考えからである。

4 この研究で目指す育てたい若手教師像

初任者教員・若手教員の授業力の到達点を「パフォーマンス課題※の設定・実践ができる教師」とした。これは教師の中に実践的な経験に培われた教材に対する知識や生徒を観る目が芽生えることが必要であると同時に、生徒の実態を的確に把握し課題を見つけカリキュラムを構成できるような、実践や理論を応用できる力も必要であるからである。

※パフォーマンス課題…「学んだ知識やスキルを応用して実践したり表現したりすることを求めるような、複雑で総合的な課題」—『逆向き設計で確かな学力を保証する』（西岡, 2008, 明治図書）より

III 研究の結果

1 Y教諭への支援

(1) I期 授業スタイルを確立する時期

PDCAスパイラルの中で課題点を明確化しつつ特に「褒める」と「発問」を目標とし、生徒を意識した授業づくりにつなげることができた。

(2) II期 より良い授業に向けて取り組む時期

示範授業（9月）や模範的な授業の参観（10月）、自己の授業VTR参観、発問計画の習慣化などを通し、魅力ある授業への意識を高めることができ、1月22日の研究授業を終えることができた。

2 授業力構造モデル

東京都教育委員会提唱の授業力の6要素を授業観察の視点の中心にする考えであったが、実際は授業を構成する要素の構造や流れが重要であると考えられたので、初任者教員が習得する上での能力の順位性や技能レベルの差が非常に捉えにくいものであることに気づかされた。そこで授業力の6要素を参考にしつつ授業力の構造モデルを作成するに至った。

3 授業記録とその項目

Y教諭に対して授業観察を継続する中で、初任者教員の力量をつかむ視点として「発問」に着目しながら記録と分析を行った。

IV 考察

1 初任者教員への効果的な指導法

Y教諭との協働から考えられる、「授業が変わる」きっかけ・節目となる効果的な支援は以下である。

- ① 模範的な授業を参観すること。ただし初任者自身の授業がある程度軌道にのり、課題意識が芽生えた時点で行うのが効果的である。
- ② VTRに授業を記録し、初任者自身でその授業を見て省察すること。
- ③ 独自のスタイルで構わないので板書計画と発問計画を毎授業ごとに作成すること。
- ④ 多くの教員に授業を参観してもらいアドバイスを受けること。

以上は初任者教員への指導のポイントとも成りうるものである。

2 授業力構造とルーブリック

(1) 授業力の構造

授業力を再検討した結果、次のように整理された。

〔I 基礎的な教授技能〕…教える力の基礎

- I-1 基礎的教授スキル
- I-2 授業設計
- I-3 カリキュラム理解

〔II 生徒観・生徒を観る目〕…生徒理解の基礎

- II-1 授業ルール（規律）
- II-2 生徒集団の理解
- II-3 個別生徒の理解

〔III 教授内容の創造・教科教育的専門性〕…基礎をつなぎ、活かし授業を成立させる力

- III-1 内容の取り扱い
- III-2 教材の使用・活用
- III-3 授業デザイン（構成・運営）

〔IV 発展的な授業展開〕…より良い授業を実践するための技術

- IV-1 内容・教材観
- IV-2 発問・指名のデザイン
- IV-3 ファシリテーション

またこれらの項目を橋梁モデルに構造化した。



(2) 授業力を見極めるルーブリック

授業力の構造図と関連し授業力を見極めるルーブリックを作成した。

- | |
|--|
| <p>0 授業をする基礎的な能力（I、II）のいずれか、もしくはその両方の要素が十分に修得できていないため授業としては成立していない。</p> <p>1 授業するための基礎的な能力（I、II）は修得できているが、その両者を結びつけ活かした授業（III）には至っていないため、不安要素の大きい授業である。</p> <p>2 確立された授業の二つの礎（I、II）の上に立ち、その両者を結びつけ生かした授業（III）が行われている。</p> <p>3 安定した授業の二つの礎の上に立ち、その両者効果的に結びつけさらに魅力的な授業実践に向けた要素や可能性（IV）を秘めた授業である。</p> <p>4 現代的な教育課題に対しても、十分対応できる授業である。</p> |
|--|

※特に2の段階までは1年次のうちに初任者教員に求めたい授業力といえる。

3 授業記録と授業を観る視点

研究の中で特に「発問」に着目して授業を観察することが、授業力を見極める際に適切であると判断するに至った。これは、発問が授業の流れを左右すると同時に、教師と生徒が関係し合う中で生きるものであるからである。この発問を分類する視点として以下のようなルーブリックを作成した。

- | |
|--|
| <p>i 授業内容に対して間接的にかかわる発問</p> <p>ii 一問一答的な発問</p> <p>iii 思考が必要な発問 答えに幅を持った発問</p> <p>iv 学習意欲を高めるような発問 本質的な発問</p> |
|--|

このようなルーブリックを評価指標として、初任者教員の力量と課題に応じて作成することは、目標設定と成長過程の見極めに有効であるといえる。